

何をめざそうとしていたか

～市民ミュージアム設立までの17年間～

可 児 光 生

現在の「みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム」の歴史は、1983（昭和58）年3月の「郷土資料館建設基金条例」の制定に始まる。「郷土資料館」の建設に向け基金を積み立てるといふ、美濃加茂市として初めての意志の表示であった。当時の市の状況は次のようなものであった。

①昭和51年度から54年度にかけ、『美濃加茂市史』史料編、民俗編、通史編の3巻が刊行された。市内の文化財と資料の調査が行われるとともに、貴重な資料の適切な保存の必要性が叫ばれていた。

②明治百年（昭和43年）を機に、広く市民に呼びかけて収集された民俗資料が、仮整理された状態で市内西町の施設などに暫定的に保管されていた。

③県道の建設に伴い、「今遺跡」（昭和53年度）、「為岡遺跡」（昭和54年度）が発掘調査され、昭和47年度に調査された「牧野小山遺跡」の出土遺物とともに、当時の旧福祉会館内などに保管されていた。

④坪内逍遙、津田左右吉という近代日本を代表する人物の生誕地であるにも関わらず、その顕彰と市内に残る遺品の保存に関して、市としての体制が整っておらず、小栗憲八氏（元太田小学校長）、尾関公見氏（元下米田小学校長）といった個人の力に頼らざるを得ない状況だった。

このような状況から、建設しようとする「郷土資料館」は資料をまず散逸から防いで展示するという目的が第一であった。国（文化庁）の方針としても当時「歴史民俗資料館建設事業国庫補助事業」が制定されており、美濃加茂市も財源計画としてその補助（国庫補助7,700千円、県補助700千円）を受けて建設することも検討がされていた。国の補助目的は「その地域の特色をしめす民俗文化財あるいは地域の流れを裏づける遺物・文書な

どの歴史資料の保存を図り、郷土の歴史と文化に対する住民の意識と理解を深めること」であった。

そのころ建設された資料館には、大垣市歴史民俗資料館（昭和57）、白鳥町歴史民俗資料館（昭和59）、伊自良村歴史民俗資料館（昭和62）、愛知県三好町歴史民俗資料館（昭和57）、同尾西市歴史民俗資料館（昭和61）などがある。文字通りその地域の歴史と民俗資料を収集保存し、展示する施設が次から次へと建設された。

基金条例制定直後の昭和58年4月からは、元美濃加茂市史編さん室長であった神保朔郎氏が社会教育課に配属され（注：筆者もこの時配属される。）、まずは地域の歴史民俗資料の調査収集というところから、「資料館」の準備が始まった。昭和61年度、市内の8地区に10名の「史料調査協力員」を設置、歴史民俗資料の収集にあたって情報の提供と協力を依頼した。



（昭和61年10月号広報）

昭和61年10月、「美濃加茂広報」では、「近い将来建設を予定している「資料館」の内容を充実するため、その基礎的な資料として地域の歴史をものがたるさまざまな収集保存活動を行っています。」と、市民に対し、資料の収集に理解と協力を呼びかけた。収集資料の内容として、「民俗資料」「歴史資料」（近世文書、明治以後の文書、古地図、地

域の歴史を示す写真)を例示している。

「資料館」のイメージ、理念は不明確ながら、まずは資料収集と調査をわずかずつ進めていた時期である。

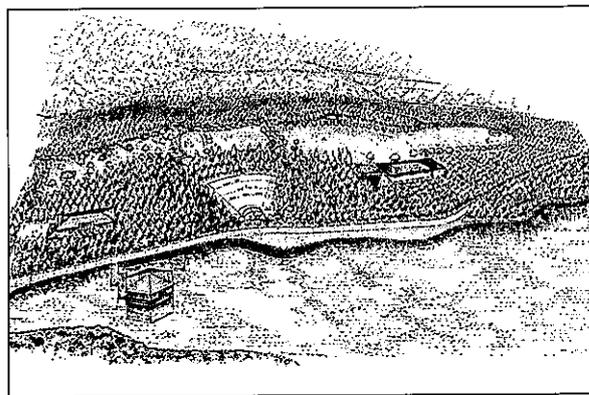
その後、昭和63年度に入り、建設に向けての調査委員会の設置が予算化された。「郷土資料館の建設について、単に展示館としての施設にとどまらず、長期的に市民の誰もが歴史や文化について活用できるような施設とするため、郷土資料館建設調査委員会を設置し、具体化に向けて研究して参りたい。」(昭和63年4月1日号「美濃加茂広報」)という趣旨である。委員会のメンバーは、市内の各種団体代表、市議会議員、文化財関係者のほか専門的立場で大学関係者などにも加わっていた。昭和63年8月に第1回の委員会が開催され、のち約1年間かけ8回の委員会を開催し、平成元年8月に「基本構想」が次のように提言された。

「各種資料の収集調査公開活動はもとより、生涯学習時代を迎え市民自らが主体的に参加したり体験できる知的文化活動の拠点として(仮称)郷土博物館の早期建設の必要性を提言する。」(「はじめに」より)とした。抽象的ながら「市民の参加と体験」という言葉が初めて表現された。この構想では、基本的性格、機能と事業、組織、規模などについて具体的提言をおこなった。館の建設位置としては次のような条件を提示している。

「知的空間の場として閑静な環境周囲に持ち、かつ体験学習の素材として付近に豊かな自然環境を持つこと」「館内にとどまらず、野外の展示スペースも含めて付近一帯で文化活動のできる広い敷地を有し、その総合的な文化空間の核となること」

それをふまえ、「(仮称)文化の森」がもっとも望ましい候補地としている。この「(仮称)文化の森」は、昭和63年度に策定された市の第三次総合計画のなかで「太陽と水と緑のなかで市民が集い、文化芸術に親しむことのできる」ところとして建設が計画されていたもので、この時から(仮称)「文化の森」に施設を立地する方向性が打ち出された。また「資料館」という名称は限定的なイメージがあり、「美濃加茂市郷土博物館」をその名称とするよう提言している。規模としては延床面積2,500平

方メートル程度を望ましいとした。



(三次総での文化の森イメージ)

この頃の動きは急で、国のふるさと創生資金を活用し、「文化の森」基本構想が平成元年度末に策定される。「郷土資料館基本構想」を前提とし、森の土地利用の案が提示された。施設の建築計画が立てられていない段階であったが、「郷土博物館」と「教育センター」を核的施設としてそれぞれ想定し配置した。生活体験館など付帯施設はまだ描かれていない。野外ステージや修景池、多目的広場などで構成される、自然を活用した都市公園的なイメージが示された。



(「文化の森」基本構想図・平成元年度)

平成2年4月には、社会教育課内に新たに「博物館建設係」ができ、学芸員も新たに採用された。この年は、建築に先行するかたちで展示の基本計画が検討され、建設調査委員の展示専門委員に指

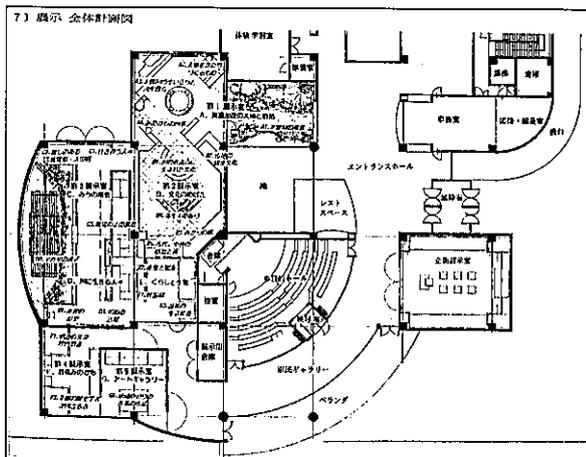
導を得ながら平成3年3月に「(仮)美濃加茂市郷土博物館展示基本計画」がまとめられた。メインテーマを「川とみちと人—文化のジャンクション・美濃加茂」とし、展示の基本理念と分野ごとの展示テーマの設定と展開計画、さらには館の運営計画と資料収集計画まで踏み込んで記している。そして、必要とされる建築空間と設備の条件を提示した。

この基本計画を現在と比較してみると次のような点に特徴や違いが見られる。

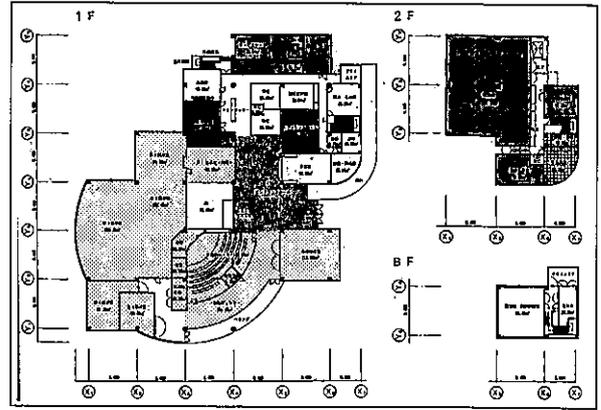
- ①常設展示の内容は、自然、考古、歴史民俗、人物、美術工芸の5分野となっており、それぞれ独立した展示室をもつ。
- ②展示手法として大型ジオラマなど固定的展示が目立つ。
- ③「みち」の主要展示物として「宿場の辻の風景」を復元展示を考えていた。
- ④イカダの流送の復元を考えていた。
- ⑤民俗部門は本館展示室内に置く。
- ⑥美術分野の展示スペースは、約50㎡と狭い。
- ⑦企画展示室を入り口に近いところに置き、連続する回廊状の市民ギャラリーとの一体的利用も考えていた。

その他展示以外の面として、

- ①収蔵庫スペースを全体の20%近くとしている。
- ②多目的ホールは、音楽部門の利用も想定し、重視している。



(展示計画平面図)



(想定建築平面図・平成3年3月)

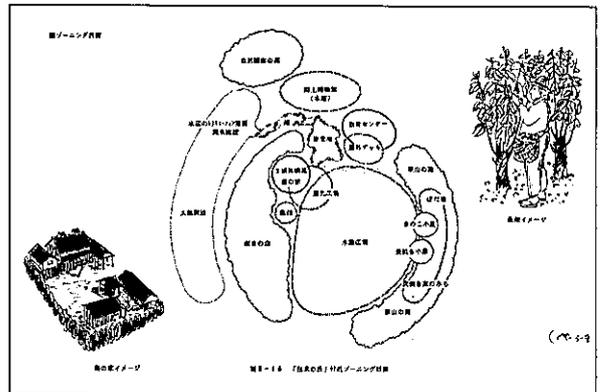
③レファレンス、図書資料室などの情報提供スペースを比較的多くとっている。

④喫茶などのスペースは無い。

といった点が上げられる。

想定する建築延べ床面積は約2,850㎡、うち展示スペースは全体の39%を考えていた。

翌平成3年度に、文化の森基本構想の見直しをしながら「文化の森基本計画」がされた。森に求められる機能を整理し検討を加えた。文化の森の2つの核として「展示の核」と「体験の核」を設定した。特に後者は、森を生かした体験学習の必要性を考えて、新しく出された発想である。



(体験の核イメージ)

「地域文化をかたちづくる基盤は、伝統的な生活習慣や古くからの生活の知恵や技術であり、それを知ることは極めて重要で、世代間交流を進めつつ体験的に学習できる場を提供する」目的で「生活体験館」(復元した養蚕民家)を建築するとしている。周辺には、庭先広場や桑畑、炭焼き小屋などを整備し、全体でかつての生活空間を構成しよ

うとしている。農家など関係者からも協力を得て、蚕の育成や、絹糸づくり、きのこや炭の生産などといった村落生活体験が行える壮大なプランとして提示している。

実現できたものはその一部ではあるが、本館内で計画していた民俗分野を屋外へ展開し、体験をしながら暮らしの知恵を学ぶ形態はこの時考えられたものである。

また、この基本計画時に、昭和63年から毎年開催していた「彫刻シンポジウム」を施設オープン後はこの文化の森で実施し、彫刻家と市民のふれあいのできる文化の発信地となることを提言している。池側の斜面林を「創造の森」と位置づけた。

翌4年度と5年度には、基本計画をうけて、文化の森の基本設計と実施設計までを作業として行った。しかし、肝心の「博物館」については、平成2年度に展示側から建築への条件提示をして以来、建築本体設計の予算化および森の造成等の工事の予算化はされなかった。

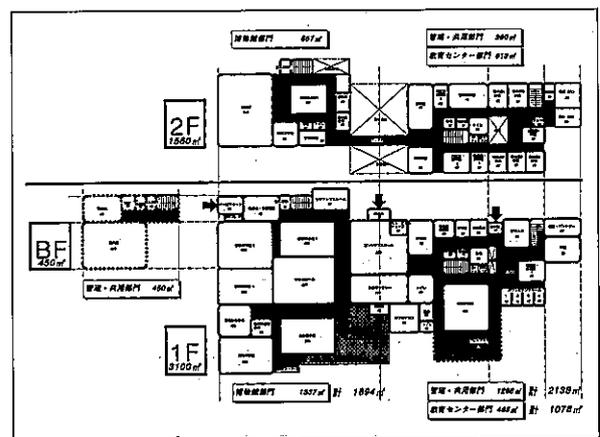
その背景には、市の財政的事情、他の大型プロジェクト（下水道整備、福祉会館、JR美濃太田駅など）の実施などがあつた。ほかに、微妙に影響を与えたのが、平成になってまもなく岐阜県が突如打ち出した「平成記念緑のふれ愛広場」計画であった。市内の山之上地区及び蜂屋地区160畝に「人と自然・人と人との共生」をテーマに整備を図ろうとするものであつた。規模やねらいこそ違うものの文化の森のコンセプトと類似する部分もあり、その計画が発表されて以後は、文化の森と平成公園との違いを絶えず念頭に置いて検討を進めることとなる（結果的には平成公園の方がオープンが後になった。）。

平成4年度には、美濃加茂市教育センターが中央公民館内に設置される。教職員の研修、教科研究、適応教室などを目的としていた。また平成5年度からは、整備予定地の埋蔵文化財の調査を開始した。古代の多数の住居跡などととも多くの遺物が発掘され、結果的にその成果は大きなものがあつた。

建築設計の予算が毎年見送られる中、平成6年秋（組織改革により、平成6年度より社会教育課

から分割して文化課が新設された。）、翌年度の予算要求に向けて一つのアイデアが出された。博物館・教育センター複合施設案である。

博物館として学校との連携はすでに叫ばれていた大きな課題であり、また、教育センターとしても学習における博物館資料の有効活用が検討されていた。管理上の効率面や建築予算の縮減もさることながら、両者が一体で活動する運営的なメリット、教育的効果、人的交流などを考え、複合したらどんな施設になるかを考えた。市の総合計画では教育センターの、建築計画年度が博物館に比べ数年後であったが、半ば強引に建築プランを提示した。



(複合施設プラン)

次の年（平成7年度）には、実現しなかったが、翌年度の平成8年度当初予算に複合施設（「文化の森プラザ」）の建築基本設計と展示基本設計が予算化された。展示の基本計画が策定されてから5年間のブランクを経てのことであつた。

平成8年度は、計画の再スタートということであつた。あわただしい年となつた。

まず、基本的な考え方として、次の4点をうちだした（平成8年6月）。

- (1) 文化の森の活動が市民生活の延長となり、格式ばらず、市民自身が気軽に利用でき、豊かな気持ちを味わえる空間とする。
- (2) 小中学校の授業の一部を「森の学校」としてここで行うなど、学校教育・社会教育の枠にとられない新しい学習や教育の姿を考える。
- (3) 地域の歴史や自然および文化的資料を保存し

て後世に伝えると共に、それらの素材を活用した「体験学習」「地域学習」を行う場とする。

(4) 市民および芸術家（主に美術工芸）の創作活動の場とし、その発表できる場を設ける。

そして具体的には①展示内容の再検討②学校活用の検討③市民活動と連動した計画づくりの3点を重点的に検討していった。この年からオープンするまで、いろいろな人々の意見を聞き、試行錯誤しながら少しずつ準備を進めていくことになる。

まず①については、基本的テーマを生かしながらも内容や展示手法などは大きく変更することとなる。博物館整備検討委員会を開催（平成8年だけで年8回のち断続的）し検討を進めた。次が、その検討内容である。

- ・民俗部門を本館常設から分離し、体験活動も重視して生活体験館と付属の民俗展示館で展示する。
- ・実物資料「もの」とそれに関する「こと」を意識して展示する。
- ・分野ごとで展示を分割せず、ワンフロアの広い空間のなかで展示を構成する。
- ・大型固定ジオラマを出来るだけ少なくし、展示替えが容易に出来るようにユニット展示をする。
- ・壁面の解説パネルは、出来る限り少なくし、手元に解説を置く。
- ・美術工芸部門の面積を広くする。
- ・テーマのひとつである「街道関係資料」は、中山道関連ということで、実際の現地での展示を想定して最低限の展示とする。

②については、文化の森整備検討委員会教育センター部会、文化の森構想教科専門部会などを通し、検討が始まった。

事務局（文化課）で次のように「森の学校」を提示、従来の形にとらわれない自由な学習形態をこの森の中で展開できないかを検討し始めた。

- ・「博物館」「学校」の枠を取り払う。
- ・一つの事象を様々な角度からとらえる。
- ・イベント的、場当たりのとしない。
- ・「秘密基地を作る」「民家の縁側でお話会」「間伐材を切り倒す」「たぬきの糸車」など森の素材を活用するメニューを考える。

学校サイドでは、まずアンケートの実施を行った。「計画立案にあたり、先生方のご要望を広くお聞きし、子どもたちのために作って良かったといえるような文化の森にしたい」と、市内の教職員252名に対し、森を利用して学習できる単元と資料、必要な施設と設備について意見を集めた。



(教職員現地調査研修)

その後「文化の森活用委員会」が発足、平成11年3月には、『学校活用の手引き』（第1集）を刊行、教科別の指導案を例示した。翌12年3月には第2集を刊行し、オープンする前から「文化の森ならではの学習」にどんなものがあるか、学校がどう活用できるか検討を重ねた。

次の言葉に、学校の思いがあらわれている。

「文化の森での教育は、学校や教師の意欲的な取り組みそのものにかかっているのです。そのために、全ての教師が文化の森に何があり、どんなことができそうか考えてください。全ての学校が文化の森で校内研修会を持ち、学校教育全体のなかで文化の森をどう位置づけるか考えてください。文化の森は美濃加茂市の各学校共有の施設です。まさに第2の学校です。この施設の活用は、各教師の文化の森に取り組む姿勢にかかっています。」

(『平成12年度活用の手引き』「はじめに」より)

学習内容の検討とともに、学習に際しての必須の条件として示されたのが、交通手段としての「バス」の導入、終日活動する際の給食であった。その要望はオープン時に実現することとなった。

③の「市民活動と連携した計画づくり」については、「市民懇話会」を開催し、市民各層の意見を聞いたほか、各種文化団体の会合などに事務局が

出席し、計画を説明し意見を聞いた。より市民のものにするには積極的なPRの必要性を感じ、平成9年から（仮）文化の森ニュースを刊行し、準備状況を公開しはじめた。

来館しようとする人々もしくは利用しようとする人々の意見を聞くことと同様に、館とともに協力しながら活動していただける人々のことについて模索をし始めた。

のちの歴史民俗資料の展示に大きな役割を果たしたのが（仮）文化の森ボランティアであった。この組織は、昭和61年度に市が依頼した「史料調査協力員」を母体とするものである。市内の歴史民俗資料の収集の協力者として活動をしていたが、平成10年5月からは、生活資料、農具、食事などを実際実演して映像に収録する活動に力を発揮した。オープン後も引き続き「生活体験ボランティア」のメンバーとして活動している人も多い。民俗分野では実際に道具を使うことのできる人の存在は不可欠であり、文化の森の大きな力となっている。



(平成10年7月・文化の森ボランティアによる「古いもの探検隊」)

平成11年1月には、美濃加茂自然史研究会が発足した。市内を中心とした動植物調査をボランティア的に実施、標本の作成など自然部門の常設展示をする際に大きな役割を果たした。また、このメンバーは開館後も館の企画展と自然観察会などにも積極的にに関わり、心強い存在となっている。

平成11年度半ば頃から、この地域に伝わる料理に関心ある人に呼びかけ、生活体験館の食事に関する部分を一緒になって考えた。結果的にそれが現在の「伝承料理の会」に発展、地域に伝わる食の体験講座「四季を食べる」を実施している。

彫刻シンポジウムは、昭和63年度、「清流と彫刻の街」をテーマに定め、公募形式、現地制作を基本として始まったもので、平成9年までの10年間で、市内の各所に35基の作品が設置された。制作が市民に公開され、関連イベントも実施するなど市民生活の中に「彫刻」というものが徐々にあるが浸透していった。（社）美濃加茂青年会議所と市民有志で組織される実行委員会が中心となり、作品の応募、選考、作家の現地制作のさまざまな準備や滞在中の段取りなどを行った。平成7年の夏には、まだ未整備の文化の森の中で現地制作、内1点の作品を先行して仮設置した。

10年間の積み重ねの中から、活動の拠点を文化の森に、という動きとなり、館の活動と連携しながら作家の招致や公開制作をしていく方針が打ち出された。このようなこともふまえ、付帯施設として宿泊アトリエ（158㎡、1階部分含む）が建設された。

オープン1年前には、作家の大久保英治氏を招き、「ランドアートワークショップ」を行った。オープン時の「芸術と自然」展は市民主体の実行委員会との共催で行われ、関わった作家たちもアトリエに宿泊して制作活動と市民参加ワークショップをおこなった。

このように、「市民参加」は、受身の参加ではなく、館とともに主体的に「参画」する形が生まれている。



(ランドアートワークショップ)

平成10年度森全体整備工事にあたり、基本的考え方を次のようにした。

- (1)エリア全体を学習や創造のフィールドにする。
- (2)管理された都市公園でもなく、人の手の入らな

い雑木林でもない、里山の良さを出す。人工的遊具は置かず、森の中の木や坂や丘を楽しんでほしい。(3)彫刻や自然を十分生かし、心をフレッシュできる森をつくる。

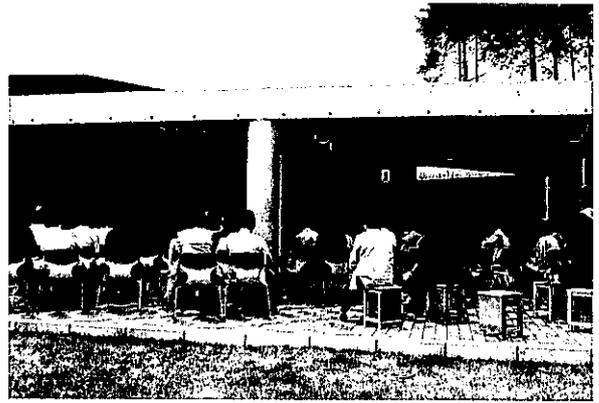
(4)生活体験館周辺は、当時の生活のにおいが感じられるような空間にしたい。

これらの点は、施設だけでなく施設を取り巻く森こそ重要であるということを行っている。「すばらしい自然環境の中でこそ、すぐれた創作活動と豊かな文化を育むことができるのではないのでしょうか」という、設立理念の①はこれに通ずるものである。

さて、美濃加茂市は坪内逍遙の生誕地である。安政6年(1859)、太田代官所の役人の子として生まれ、のち近代小説の理論書である『小説神髓』を著したほか、シェークスピアを日本ではじめて全訳したことで有名である。逍遙については、常設展示室において原稿や遺品、地域との関わりを示す資料などを展示している。

毎年5月には、シェークスピアの演劇が逍遙生誕祭として上演されてきた。市民から参加者を募り、東京の劇団とともに逍遙の訳した脚本で舞台を行ってきた。文化の森のオープンには、何回ものワークショップを行って準備し、「真夏の夜の夢」を野外劇という形で上演した。キャストとスタッフとして市民が公演をささえた。

坪内逍遙は、「朗読」を一つの芸術として確立したことで知られる。美濃加茂市では平成6年度から「坪内逍遙大賞」を設け、逍遙の精神を引き継ぎ演劇界で大きな貢献のある人に賞を贈っている。平成8年度に女優の加藤道子氏が受賞者となって以来朗読を学び楽しむ人たちが増え、のち「みのかも声のドラマの会」という組織ができた。この事務局はみのかも文化の森にあり、講座の開催や年1回の発表会であるフェスティバルなど、市民の朗読活動を支援している。平成12年4月には、この会と市民有志により「春・朗読の一日」が実施された。森内の4会場で朗読が1日中行われた。このように、坪内逍遙という、館が持つ一つの文化的資源をもとに、ミュージアムを拠点にした市民文化が展開されつつある。



(春・朗読の一日)

これらのことは、「これからのミュージアムは、もっと積極的に地域の文化的拠点として機能し、地域づくりを考えた社会的存在であるべきだ」との考えのもとに実施されているものである。展覧会などにとどまらず、館が持つ有形無形のものや資源をきっかけにして、それぞれのテーマや課題で人々が集い交流する場となることをねらっている。そして、大事なことはそれが1回限りでなく継続して行われ、館としてさらには地域の「文化力」として蓄積されていかなければならないと考えている。

従来のミュージアムの枠やイメージにとらわれることなく、地域の人々がふだんの生活の一部としてミュージアムが利用されていくような「仕組み」や「仕掛け」をこれからも考えていきたい。

紆余曲折、試行錯誤しながら、オープンの準備は進められた。関係する人々との議論や協力者との共同作業が何年も繰り返された。そんなプロセスを通して、それまでおぼろげだったミュージアムの「理念」というか「目指すべきもの」が見えてきた。最初に理念ありきだったのではなく、それはだんだんと浮かび上がってきたのである。

文化の森／市民ミュージアム 4つの理念

- ①緑豊かな開かれた「森」
- ②「森の学校」という考え方を持った「森」
- ③市民と一体、参加型の「森」
- ④地域づくりを基本に考えた「森」

(かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

彫刻の街とミュージアム

～ワークショップの記録～

市原 有紀子

2000年秋のオープン以降、美濃加茂市民ミュージアムでは、参加者と作家の出会いを第一の目的としたワークショップを行ってきた。

作家の存在を知り、思いを作品から感じ取る、そして心やからだを使って作家といっしょにひとつの作品をつくりあげることが、オープン記念展「芸術と自然－美濃加茂自然環境会議2000－」の山口啓介ワークショップに始まり、当館をとりまく森をフィールドにしておこなってきた。

美術館において、ワークショップを行うときに、関わる作家がその土地を知ること、そして参加者が作家を知ることが、共に重要なことである。その考えを美濃加茂市では、1989年から10年間行われた美濃加茂彫刻シンポジウムによってあたためてきた。

このシンポジウムは、(社)美濃加茂青年会議所と市民有志が中心となって運営にたずさわった。一般的にシンポジウムとは「討論会」と訳されるが、1989年第1回の招待作家による制作と一部の作品を除き、ここでは公募によって選考された作家による現地制作を意味するもので、約1ヶ月作家はこの地で過ごす。

シンポジウムの会期中は、実行委員会メンバーが作家の制作のサポートをする。大型彫刻制作のための資材、重機といったものは組織内で準備し、運営が進められた。



シンポジウム制作風景

原則として公開制作であるため、市営の公園や人通りの多い場所を利用して、自由に作家の制作現場を見学できる。初め、遠くから制作現場を眺めていたこの地の人々も、回を重ねるごとに作家の存在を知り、会話を交わすようになった。またシンポジウム中には、親子での造形教室などを企画し、作家と市民との交流がはかられた。

また作家側にとっても、滞在して制作することでこの地を意識し、設置場所をあらかじめ把握したうえで制作に取り組むので、自然に美濃加茂のイメージが作品に反映するのである。

この流れを受けついでいるものが、当館の敷地内に設けた宿泊アトリエである。これは、ある一定の期間滞在して制作をする作家のことを考えて建てられたもので、ミュージアム主催の展覧会やワークショップの作家が、制作に集中することが可能である。

10年間にわたって活動が行われ、その結果、市内に置かれた35の現代彫刻は人々の目に触れ、この地の人々に彫刻といえば、具体的な形を持たない抽象的な彫刻をイメージさせるまでになったのである。

現在シンポジウムは「清流と彫刻の街 実行委員会」として、当館を拠点に自然と芸術をテーマに作家によるワークショップ、現地制作を行いながら、新たな方向を見出そうとしている。

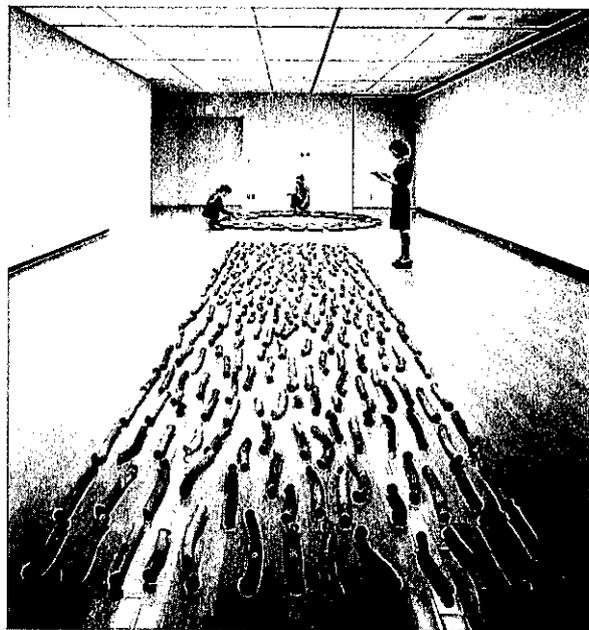
2001年、美濃加茂市民ミュージアムでは、清流と彫刻の街実行委員会とアートボランティアと共に二つの大きな事業を実施した。その一つである渡辺泰幸氏によるワークショップの記録をここに紹介する。

ワークショップ「土を焼いて音をつくる」

造形作家・渡辺泰幸氏は、土を主な素材として扱っている作家で、形の美しさとともに作品から発する音に触れることで、作品はより広がっている。

くものである。

ワークショップと同時に開催した「渡辺泰幸展」での作品は、直径約1.5寸の二重の円と長さ5寸、幅1.5寸の長方形が、個々の集まりによって構成



渡辺泰幸展 2001. 6. 5～6. 24 (撮影:Ito Tetsuo)

されていた。円を形作るものは、楕円形をしており、ドーム状の表面には1～3つの切り込みがある。その切り込みは、勢いよく引かれたもの、緩やかに引かれたものなど様々である。一方、四角を形作るものは、筒状のやきもので、筒の直径は約5寸、長さは10～30寸と様々で、中に小さな粘土の玉が入れている。両端は蓋がされており、振るとカラカラと乾いた音が鳴る。個々の形は、どこか古代の道具、または民族楽器を連想させるが、全体として見た場合、一つ一つが作る直線のイメージが広がる。

この渡辺氏の作品と同様に、ワークショップでは、粘土を成形して野焼きして仕上げ、音をきくまでをひとつのものと考えた。ここに、その流れを紹介する。

◇ワークショップ当日までの準備

清流と彫刻の街 実行委員会とアートボランティアによる準備が進められた。

4月17日 (アートボランティア定例会)

渡辺泰幸氏との顔合わせ、作品についての話を聞く

5月15日 (アートボランティア定例会)

渡辺氏と陶芸室で試作品づくり

6月3日 展示室にて「渡辺泰幸展」準備

6月19日 (アートボランティア定例会)

渡辺氏と共にワークショップ当日の役割など最終チェック

1. 粘土で成型する

日時：6月24日(日) 13:00～16:00

場所：エントランスホール

参加者：約97名

完成作品：約300個

アートボランティアによる説明の後、企画展示室に移動し、同時開催中の「渡辺泰幸展」にて作家から作品についての話を聞き、実際に作品を手にとってその感触を味わう。



作家からの作品解説



会場にもどり、制作板を受け取って、粘土を取りに行く。粘土の塊を手動の絞り出し機に入れレバーを引き下ろす。筒状になって出てきた土を切り、装飾用の粘土少量を受け取り制作開始。動物をイメージして耳や手

を付けたもの、ヘラで線を描き模様を付けたものなど様々であるが、基本は渡辺氏の作品である。筒の中に約1cmの粘土の玉を紙に包んで入れる。これは玉が本体に付かないようにするためで、焼

成時に紙が燃えて玉が自由に動くしくみである。そして両端の粘土をつまみ蓋をして、焼成時の破裂を防ぐため小さな穴を開ける。そして、受付番号を刻み、後の作品展示用に写真撮影をして、乾燥させて作業は終了である。

約1週間乾燥させた後、実習棟陶芸炉で素焼きをする。この時点で、作品は黄土色から素焼きのオレンジ色に変化した。

2. 野焼き

日時：7月22日(日) 10:00~17:00

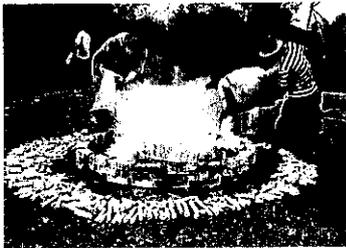
場所：南駐車場南

参加者：約14名

この日は、梅雨明けの猛暑であった。

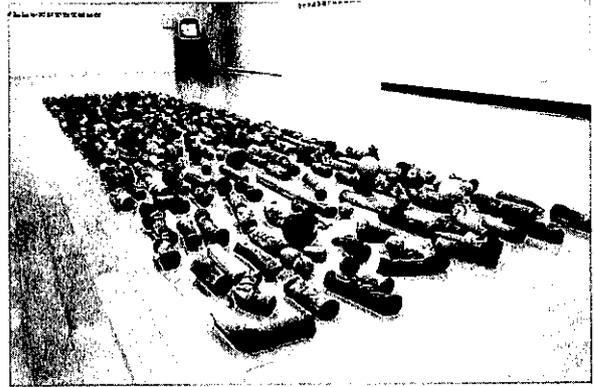
渡辺氏、実行委員、アートボランティアそして館の職員数名が、開始前から資材を準備した。

まず、トタン板を地面に敷き、その上にレンガを直径約1.5寸の輪にして組んだ。そこへ、薪ともみ殻を入れ火をつける。火が全体に回るまで、作品でレンガを囲み、投入の準備をする。渡辺氏の合図で、一斉に火の中へ置いていく。熱さで、火に近づくことができず、思ったように作業ができな



いが、約300個の作品を入れて、新たにもみ殻をかぶせた。その後、火の勢いを保つために小枝を燃やし焼け具合を確認しながら焼成を続けた。焼成開始から約4時間後、火バサミを使い、灰の山から作品を取り出す。僅かに残る火は熱く近寄ることができない。濡れたタオルで顔を覆い土の燃える匂いを嗅いだ。作品は、部分的に黒・灰色に変化し、野焼きによって作品は完成した。

ワークショップ作品展示の準備をアートボランティアと共に行う。18寸×7寸の美術工芸展示室に、約300個の作品を渡辺氏の作品と同様に床に並べ、それを囲むかのように展示室壁に、6月24日におこなった粘土での成型の様子と参加者一人一人の写真、7月22日の野焼きの様子を貼る。



ワークショップ作品展示の様子

3. 音をきくー永田砂知子さんによる演奏ー

日時：7月28日(土) ①11:00~11:30

②14:00~14:30

場所：エントランスホール

入場者：約60名(午前・午後あわせて)

作品の音を聞くということを重要なポイントとしているこのワークショップで、その目的を永田砂知子氏による演奏で行うこととなった。

永田氏は、パーカッションの演奏家である。クラシック、現代音楽、民族音楽など、様々な音楽を経験した後、即興音楽の世界へ入る。楽器以外の様々なものに興味を持ち、創作楽器、立体芸術作品、サラダボールやフライパンなどの日用品を用いて、音だけでなく身体の動きをともなった表現をしている。

永田氏は演奏会前日来館し、渡辺氏の作品とワークショップの作品、会場となるエントランスホールから演奏のイメージをつかんでいた。そして、数多くの渡辺氏の作品から選んだものを感じたままに並べた。並べることから音は作られ、空間はそのまま音へと移行する。

リハーサルは夜半まで続けられ、永田氏はアトリエに宿泊をした。

当日、永田氏、渡辺氏の紹介の後、演奏会が始まった。楽器として使われた作品は、「渡辺泰幸展」での出品作品の一部と過去の作品、ワークショップでの制作作品の一部で構成され、マレットで叩いて音を出すものと作品自体を動かして音を出すものの2つであった。

何かを待っているかのように、心の中もしくは

身体全体でその場をよみ、そこに流れる空気を感じ取ってから、鳴らしはじめた。ゆっくりと上下左右に動かす手の動きは、作品の奥底から土の持つ力を引き出そうとしている様で、乾いた甲高い音とかすかに残る低くて骨太の音が、ホールに響いていた。時にすばやく作品の合間をぬって動くさまや激しく連打する手の動きは、パフォーマンスのアクセントとなり、見る側に緊張感を与えた。子供の泣き声、演奏の横を通り過ぎる人の足音など、すべてを飲み込み演奏は続けられた。



永田砂知子氏による演奏会

正面玄関から入場する来館者は、聴き慣れない音と見慣れない光景に足を止めているようであった。演奏をとりまく観客は、永田氏の低い姿勢にあわせるかのように、床に座り込んでいた。演奏者との距離を身近に感じる時間であった。

約20分の演奏が終わり、展示室に移動して、渡辺氏と共に永田氏から、作品から感じたことや音に対する気持ちなどを聞く機会を設けた。音の楽しみ方、それは音楽ではなく石や水の音など、原始の時代から存在する音を純粹に楽しむこと、そして身近に存在する音をあらためて聞いてみてほしいといった興味深い話であった。

その中でワークショップ参加者は、焼き上がった自分の作品を探し、振って音を確認していた。作品の小さな穴からは、灰となったもみ殻がこぼれるという一面もあった。

ものを作る者とものを演奏する者が、一つのもののお互いから刺激を受け合っていることに、新しい可能性を感じた。

それから約2週間展示は行われ、燻された土のにおいのする展示室からは、毎日カラカラと音が聞

こえていた。会期中、演奏会の様子を展示室内でビデオ上映し、最終日、作品の受け渡しを行ってワークショップは終了した。

ものを作るということにとどまらず、違う角度から作品を鑑賞するという今回の試みは、渡辺氏のコンセプトから知恵を得た、良い企画であったと思う。また、来館者、作家、サポートする側という大勢の人が関わるワークショップという手段によって、人と人が直接に出会う場所が提供できたと思う。

しかし、参加者すべてが理解した上で行っている訳ではないだろう。講師や館の人間が一方向的に進めて強要することは不自然であり、参加する側の自発的な行為を引き出すことが求められるのではないだろうか。

約2ヶ月という時間をかけて行った今回のワークショップで感じたことの1つに、美術館の展示室における学習の可能性がある。

「渡辺泰幸展」会期中、市内の6の小学校が授業として展示室に入った。渡辺氏の作品を囲み、教師の合図を待たず、作品に触れる生徒が多数みられた。少しの解説と扱いの注意を述べた後、思い思いに作品を鳴らし、壊れる勢いで作品にふれる生徒に、私自身緊張の面持ちでいた。

鑑賞時間の終了が近づき、生徒たちが手を止めた。まとめとして「今の時間は何の授業だったのだろう？」という問いかけに、大多数の生徒が「音楽」と答えた。驚くことに、「美術」(図工)という発言があまりに少なく(これは、大体どこの学校も共通して言えることで)、なかには、「社会」「理科」という発言もあった。残念に思う反面、可能性を感じながら、「屋外で風景を描くこともここで作品に触れて土の温度を感じ、音から何かを感じることも同じである」と願いを込めて伝えたのである。

彫刻を街にもたらした人達と共に企画した、今回のワークショップで得たことは、かたちあるものばかりが彫刻でない今、分野をこえて、あらゆる角度から何かを観察し、感じることで美術館の機能を目一杯引き出していくことが求められるということである。

(いちばら ゆきこ 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)